

大正期の終末論と都市空間

——内村鑑三のキリスト再臨運動——

台湾国立高雄第一科技大学 赤江達也

本報告の目的は、大正期の日本でキリスト教著述家の内村鑑三が展開した終末論的宗教運動である「キリスト再臨運動」の社会的条件を明らかにすることである。とくに東京という都市空間における宗教的・文化的な出来事としての側面に注目する。

内村鑑三は1918（大正7）年1月から翌年5月にかけて、中田重治、木村清松というふたりの牧師と協力しつつ「キリスト再臨運動」という講演活動を展開する。内村らは神田の東京基督教青年会館および三崎町キリスト教会を主な会場として継続的に講演会を開催し、多くの聴衆を集めつづけた。彼らの講演会は毎週1000人から、ときに2000人にも上る聴衆を集めた。

このキリスト再臨運動の成功は、大正期の東京において一種の「終末論ブーム」があったことを示している。このような終末論的宗教運動の興隆の背景には、第一次世界大戦の継続、戦争インフレと米騒動のような社会不安があった。また、1917年はマルティン・ルターの「宗教改革四〇〇年」にあたり、信仰復興への期待が生じていたことが考えられる。

「キリストの再臨」とは、救世主（キリスト）イエスが、この世の終わりにふたたびこの世にやってくることを意味している。そのとき最後の審判があり、「神の国」が完成するとされる。この「キリストの再臨」自体は、キリスト教の一般的な教説である。ただし、再臨が迫っていると訴えることは、近代プロテスタンティズム主流派では熱狂主義的な逸脱とみなされた。それゆえにキリスト再臨運動は多くの聴衆を集める一方で、キリスト教界内に批判と反発を引き起こした。

このキリスト再臨運動の聴衆は、特定の教派・教会に属するキリスト教徒たちだけではなかった。中田重治（ホーリネス教会）と木村清松（会衆派）はプロテスタントの牧師であったが、内村鑑三は「無教会主義」という特異な立場を唱え、既存の教派・教団の外でいわゆる「無教会運動」を展開していた。

内村鑑三は1919年5月に再臨運動を離れるのだが、その無教会運動は再臨運動を契機として拡大する。内村はそれ以前から個人雑誌『聖書之研究』を発行しつつ、新宿・柏木で会員制の閉鎖的な聖書研究会を主宰していた。それが、再臨運動を契機として、東京・大手町の大日本私立衛生会館で500人から800人の大規模な講演会を開催しはじめる。それは、1923年の関東大震災で衛生会館が倒壊するまでつづいた。

このようなキリスト再臨運動の成功と無教会運動の拡大を支えていたのは、不特定多数の流動的な聴衆である。彼らは〈必ずしも教会に所属しているわけではないが、キリスト教の講演会を聴きに行くような人びと〉であり、宗教的言説を消費する都市新中間層であった。

終末論的宗教運動の興隆の社会的条件を考える上では、①まず〈講演会に集う聴衆〉という受け手の存在が重要であり、②同時にそうした人びとを収容しうる都心の大会場、および都市交通といった都市の物質的な条件に注目することが必要となる。③さらに、内村鑑三の終末論的言論において「東京」のイメージがどのように表象され、意味づけられていたのかということも重要な論点となる。

本報告では、これらの諸点を具体的に検討することで、大正期日本の「終末論ブーム」の社会的条件、とくにその重要な一側面としての都市的条件を明らかにする。

文献

赤江達也、2013、『紙上の教会』と日本近代——無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店。

赤江達也、2017、『矢内原忠雄——戦争と知識人の使命』（岩波新書）岩波書店。

黒川知文、2012、『内村鑑三と再臨運動——救い・終末論・ユダヤ人観』信教出版社。

永嶺重敏、2001、『モダン都市の読書空間』日本エディタースクール出版部。